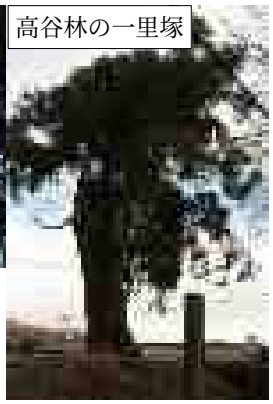
18　徳次郎宿

徳次郎宿は、江戸から18番目の宿場。徳次郎宿は南から下徳次郎、中徳次郎、上徳次郎の3つの宿場に分かれていたが、1つの宿場として扱われることもあった。また門前・田中・西根の三ヶ村を加えて徳次郎六郷と呼ばれている。
幕末期の記録日光・奥州・甲州道中宿村大概帳によると、町並みの長さが9町17間（約1km）、宿内惣家数168軒（旅籠72軒、本陣2軒、仮本陣1軒、脇本陣・問屋場各3軒）、宿内人別653人（男339人、女314人）、駄賃・賃銭（下徳次郎より）荷物一駄・乗掛荷人共140文、軽尻馬1疋90文、人足1人68文でした。
「此宿之儀は上中下徳次郎宿と相分候得共、門前村・田中村・西根村一躰にて徳次郎六郷と相唱来」（日光・奥州・甲州道中宿村大概帳）
徳次郎石を使った伝統的な石蔵など、明治から昭和初期の建物が残っており、宿の面影を感じることができる。

62 宇都宮宿～徳次郎宿

栃木県宇都宮市
大杉屋 ～ 下徳次郎
（ 歩行距離 1841m 23分 ）

歩く地図でたどる日光街道
http://nikko-kaido.jp/
JZE00512@nifty.ne.jp



29 高谷林一里塚

日本橋から29番目で江戸時代の面影が残る一里塚。東の塚には大きな杉、西側の塚には桜と檜が生えている。塚は街道より高い所にある。

coffee time 徳次郎の地名の由来

「地名の起こりは宝亀9年（778）二荒山より智賀津明神を勧請せし故、日光山の久次郎に対し、彼山の外なる義にて外徳次郎と号し、又日光より遠きをもて遠久次郎とも書しといふ。後、新田徳次郎なる者、当所に居住せしゆへ文字を徳次郎と改たむ。はじめは上徳次郎の一村のみなりしを中徳次郎村・下徳次郎村・門前村・田中村・西根村の六ヶ郷に分てり。今これを徳次郎宿六郷と号す。ともに新里の庄なり」（日光道中略記）
徳次郎の地名は、宝亀9年（778）二荒山神社より知賀都（ちかつ）明神を勧請したので、日光山の久次郎（くじら）村に対し彼の山の外という意味で外久次郎（そとくじら）村と号し、日光より遠いので遠久次郎とも書いた。後、新田徳次郎なる者が当所に居住したので文字を徳次郎と改めたという。この辺りの人は今でも「とくじら」という。
「宿駅となりし年代詳ならざれど、元和3年（1617）日光へ御鎮座あらせられし頃は、上徳次郎宿のみにて人馬を継立しが、中下の二村も願ひにより享保13年（1728）より上中下合宿と定められ、一月を三分して上10日を中徳次郎、中10日を上徳次郎、下10日を下徳次郎と割て人馬継立を役す。此割方、上中下の次第に配当せざるゆへは、三村合宿となりし時、中旬は往還の旅人も多くして継立混雑なるべければ、仕馴たる方にて扱ふべしとて上徳次郎を中旬と定められ、遂に永例となる」（日光道中略記）

coffee time 宇都宮の地名の由来

宇都宮とは二荒山神社の別号で、それが地名に転化したといわれる。なぜ、二荒山神社の別名が宇都宮なのかについては、服従しないものを征討する宮「うつ（討つ）の宮」、日光から移しまつった「うつしの宮」など諸説があるほか、下野国「一ノ宮」の転化であるともいわれている。

coffee time 参道

神社の入口には必ず鳥居があります。必ず神社の一番外側にある「一の鳥居」をくぐって、参道へと入りましょう。このとき軽く一例をします。これを「一揖(いちゆう)」といいます。参道を進むときは参道の中央を進んではいけません。参道の中央は「正中」といって、神様が通る道なので、我々が通るところではないのです。ちなみに、「一の鳥居」から内側にある鳥居は、順に「二の鳥居」「三の鳥居」といいます。

coffee time 六観音

真言宗では聖観音、十一面観音、千手観音、馬頭観音、如意輪観音、准胝定観音を六観音といい、天台宗では准胝定観音の代わりに不空羂索観音を加えて六観音とする。
六観音はあらゆる生命は六種の世界に生まれ変わりを繰り返すとする六道輪廻の思想に基づき、六種の観音が六道に迷う衆生を救うという考えから生まれたもので、地獄道（聖観音）、餓鬼道（千手観音）、畜生道（馬頭観音）、修羅道（十一面観音）、人道（准胝観音）、天道（如意輪観音）という組み合わせになっている。

coffee time 十一面観音

多面多臂饒（たひ）の変化観音は、ヒンドゥ教の影響をうけて生まれたが、日本で最初に現れたのは奈良時代の十一面観音である。十一面観音の多くは二臂で、左手に蓮華をさした水瓶を持つが、頭上に10ないし11の小さな面をいただく。この数字はあらゆる方向（十方）に向かってすべての衆生の悩みを観る徳と力を示したものだといわれている。

coffee time 十三仏

十三仏は、十王をもとに日本で考えられた、冥界の審理に関わる13の仏（正確には仏陀と菩薩）である。また十三回の追善供養（初七日～三十二回忌）をそれぞれ司る仏さまとしても知られ、主に掛け軸にした絵を、法要をはじめあらゆる仏事に飾る風習が伝えられている。
閻魔王を初めとする冥土の裁判官である十王と、その後の審理（七回忌、十三回忌、三十二回忌）を司る裁判官の本地とされる仏である。
不動明王（泰広王　初七日）・釈迦如来（初江王　二十七日）・文殊菩薩（宋帝王　三十七日）・普賢菩薩（五官王　四十七日）・地蔵菩薩（閻魔王　五十七日）・弥勒菩薩（変成王　六十七日）・薬師如来（泰山王　七十七日）・観音菩薩（平等王　百か日）・勢至菩薩（都市王　一周忌）・阿弥陀如来（五道転輪王　三回忌）・阿合閦如来（蓮華王　七回忌）・大日如来（祇園王　十三回忌）・虚空蔵菩薩（法界王　三十三回忌）

coffee time 不空羂索観音

羂（けん）は獣を捕らえる網、索（じゃく）は縄で、羂索とはインドで戦いや狩猟に用いた端に鐶（わ）がついた投げ縄のこと。不空（ふくう）は願いをむなしくしないの意味だから、衆生をすべて洩らすことなく、慈悲の投げ縄で救ってくれる変化観音である。ふつうは一面三目八臂につくられる。

coffee time 聖観音

観音菩薩には聖観音と変化観音とがある。聖観音はふつうの人間の姿で、独尊でも信仰されるが、勢至菩薩とともに、阿弥陀如来の脇侍（きょうじ）となる。宝冠に阿弥陀如来の化仏（けぶつ）をいただくのが特徴である。

coffee time 如意輪観音

立て膝で頬に指を当てた姿態の坐像で、一面二手、四手、六手像が一般的である。如意宝珠と輪宝（りんぽう）をもつ変化観音である。如意輪宝珠は、あらゆる願いを意の如くかなえる宝珠で、財宝をだし、災難・病苦を去られる不思議な力を持っている。輪法は仏教世界における聖王（転輪聖王　じょうおう）が持つ第一の宝で、車輪型の武器であり、軍の先頭を前進し敵を破砕する。釈尊の説く法は輪宝のような力をもって衆生の迷いを破砕するから法輪であり、説法はそれをころがす転法輪である。江戸時代中期以降は、女性の信仰の対象になることが多くなり、月待供養、念仏供養などの主尊として数多くつくられるようになる。

六所神社

「此新田は上州藤岡のもの来りて開発せしといふ」（日光道中略記）藤岡集落の総鎮守である。